

「知る」ことの意味

竹早高校 1年

黒崎 沙安

私は以前、難民や紛争などの発展途上国における問題について、「知ることが大切である。そして、それを伝えることが大切である。」と考えていた。しかし、その考えに疑問を持ったのである。

きっかけは、「ホテル・ルワンダ」という映画だった。この映画は家にDVDがあり、小学生の頃から何度も見ていた。

この映画は1994年に、アフリカの小さな内陸国、ルワンダで起きたジェノサイドでの実話を基にしている。ルワンダ虐殺では約3ヶ月で50~100万人の人が亡くなったと言われ、多くの人々が他国へ逃れた。

この映画を最近、また見た。小学生の頃はただただ恐怖を感じるばかりで、他のことには目を向けられなかったが、今は他にも感じるものがたくさんある。

とても心に刺さったシーンがある。主人公が取材をしていた白人記者に「この映像が放送されれば、ルワンダは救われる。」と言うと白人記者はこう返したのである。「いや。先進国の人達はこの映像を見て、怖いねって言いながら、ディナーを続けるだけだよ。」私はこの言葉に、はっとさせられ、そして返す言葉が見つからなかった。なぜなら、私も「ディナーを続ける」側の人間だからである。

おそらく、日本人のほとんどが「ディナーを続ける」側の人間だろう。私達は「知る」機会を与えられながら、ほとんどの人達は、なんとかしなければ。と思い、行動することは無いのである。

つまり、私達の心が変わらなければ、「知る」と「伝える」ことでは、失われてゆく命を救うことはできないのだ。と私は久々にこの映画を見て思ったのだ。

では、私達はどうすれば良いのだろうか。

ネット社会が発達した今、私達は「知る」と「伝える」ことがとても容易になった。世界中の多くの人々の目に触れ、行動力ある人が行動を起こすのである。例えば、災害で助けを求める内容をツイッターに投稿する。それを見る（知る）人が、リツイートして拡散する（伝える）そして、その人々の中で警察や消防などのしかるべき機関に救助・救援を依頼する人、自ら助けに行く人、物資を送る人がいることを最近、聞くことがあるだろう。つまり、個人個人での力は小さくても、ネット社会では、大きな力にできる可能性があるということだ。

その源を辿れば、確かに「知る」ということは大きな意味を持つのだろう。しかし、その後の過程がなければ、「知る」ことの意味は小さくなってしまわないだろうか。

「ディナーを続ける」側の私達は、「知る」だけではなく、その後の過程を作ることでも大切な責務なのである。

私は、その過程の全てを誰か一人でやるべきだとは思わない。多くの人々がたとえ少しずつでもその過程に係れば大きな力となるだろう。と考えるのだ。そして、自分はその

問題に無関係でない。と思うことが大切なのだ。

その力は、難民や紛争だけでなく、もっと身近な教育や福祉等の他の問題にも発揮されるだろう。

ルワンダ虐殺が起こったとき、「知る」ことの後の過程を作ろうとしなかった「ディナーを続ける」側の人達。彼らには無関係だったからだ。

無関係ではなくなることが容易になった今、私達が少しでも「知る」ことの意味を大きくして行くことが必要なのだ。

今、私は「伝える」までしかできていない。しかし、いつかは「行動」できる人間になりたいと強く思う。

「知る」ことの意味を大きくすること。無関係であるという意識を無くすこと。それがいつか、世界中の様々な問題を解決すると信じ、世界の人々が幸せになることを祈っている。